

基礎実習の検討

— 基礎実習終了時におけるアンケートをもとに —

林 喜美子 ・ 宇野 恵子
谷原 政江 ・ 大島 百合子
前田 由美子

Examinations of Basic Practices:

A questionnaire survey to finished basic practices

Kimiko HAYASHI, Keiko UNO
Masae TANIHARA, Yuriko OSHIMA
Yumiko MAEDA

概 要

昭和56年5月に基礎実習が終了した第一看護科8期生88人を対象に、実習前学内演習の効果および実習目的の認識度に関する調査をした。

その結果を基に、過去2回の基礎実習の計画および指導上の問題点を明確にし、効果的な実習計画、指導のあり方に検討を加えたものである。

基礎実習が看護学総論の一環であり、臨床実習の第一段階であるという教育課程全体の中で位置づけをふまえた実習計画であること。そして、看護学総論を担当する教員が、その事を十分認識して、学生の指導に当たるとともに、臨床指導者に理解してもらえるような働きかけをすることが現在の問題解決の一步である。

1 はじめに

本看護科では、看護学総論の一環として臨床実習の中で基礎実習をしている。

基礎実習は、看護学総論を土台として学習した看護の基礎的な理論、技術を、臨床の場で患者との対応を通して学ぶことであり、臨床実習の第1段階でもある。

基礎実習は、昭和48年(1期生)からしているが、昭和52年(5期生)までは教育課程の変遷に伴って実習目的や方法を変えてきており、昭和54年(6期生)から現在と同じ体制でしている。

毎年実習終了時に反省会を持ち改善してきたが、問題点を総合的に検討し本学に適した基礎実習のあり方を明確にするまでには至っていない。

今回第一看護科（8期生）の基礎実習が終了した時期に、学生へのアンケート調査を行い、過去2回の基礎実習を含めて実習計画・時期・指導上の問題等について再検討した。いくつかの問題点と今後の方向づけを明らかにすることができたので、ここに、第一報として報告する。

Ⅱ 基礎実習および学内演習の概略

1 基礎実習の位置づけ（表1）

- 1) 看護学総論の一環として、総合実習Ⅰとする。
- 2) 臨床実習の第1段階として、成人看護実習の前にする。
- 3) 学科としては、1年次における一般教育科目、専門科目、看護概論、看護技術等が終了した2年次1学期に行う。

2 実習形態

1) 実習期間

昭和56年5月18日～5月23日（44人）

昭和56年5月25日～5月30日（44人）

2) 実習場所

外科病棟3カ所（脳神経外科・リハビリテーション、整形外科、消化器外科）

内科病棟4カ所（血液内科、呼吸器・神経内科、消化器Ⅰ内科・皮膚科、消化器Ⅱ・内分泌内科）

3) 実習目的

- ①患者の基本的欲求を理解し、それを満たすための援助の方法を学ぶ。
- ②患者への援助を通して、基礎的看護技術を体験する。

4) 実習目標

- ①基本的欲求の12項目にそって、患者を観察する。
- ②項目の1つ1つについて、援助の必要があるか否かを判断する。

表1 基礎実習の位置づけ

1 年 次												2 年 次												3 年 次																							
/月																																															
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3												
← 講義・演習 →												← 基礎実習 →												← 臨床実習 →												← 管理・保健所実習 →											
一般教育科目・看護学 専門科目																								前期実習																							
1 日－8時間 1 時間－45分 1 週－44時間																								1 日－9時間 1 時間－50分 1 週－36時間																							

- ③援助した項目についての患者の反応と、自分の判断が適切であったか否かを考える。
- ④基礎的看護技術をチェックリストにそって、実施し自己評価する。

5) 実習方法

実習は、グループ実習とする。1グループの人数は、6～7人である。1グループに短大教員が1名指導にあたる。

学生は患者を1名受け持ち、その患者を通して実習目的の①、②について学び、受持患者記録用紙1号、2号に記録する(表2, 3)。

1号用紙には受け持ち時の患者の状態を記録する。2号用紙には、基本的欲求の12項目を挙げて、患者の状態を観察し、援助の必要な項目はどれであるか判断し、どのような援助をしたのか、その時、患者の反応はどうであったか、自分の判断は適切か否かを記録する。

表2 基礎実習 受持患者記録 1号用紙

実習病棟 _____ <hr/> 受持期間 始 年 月 日 終 年 月 日 <hr/> 患者氏名 _____ ()才 男・女 <hr/> 現住所 県 市 _____ <hr/> 病 名 _____ <hr/> 入 院 年 月 日 _____ <hr/> 記入方法 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p style="text-align: center;">現在の患者の状態</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 体格, 栄養状態 2. 食事, 排泄 3. 安静度 4. 患者の一日の日課 5. 嗜好品 6. 家 族 7. 姿勢, 体位 8. 身だしなみ, 皮膚の清潔 9. 態度, 表情, 性格, ことばづかい 10. 訴えがあればそれはどのようなことか 11. 入院生活をどのように受けとめているか 12. その他必要と思われることについて </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; min-height: 400px;"> <p style="text-align: center;">現在の患者の状態</p> </div>
--	---

(1号用紙)

表3 基礎実習 受持患者記録 2号用紙 学籍番号() 氏名()

月/日	項 目	患 者 の 状 態	援 助 の 必 要 性	援 助 し た 事 柄	患 者 の 反 応 ・ 評 価

基本的欲求項目は、ヴァージニア・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」から、基本的看護の構成要素に基づいて次の12項目に、まとめたものである。

- ①患者の呼吸が楽に行われるように援助する。
- ②患者の体温が生理的状态にあるように援助する。
- ③患者の食生活が適切におくれるように援助する。
- ④患者の排泄が順調に行われるように援助する。
- ⑤患者の睡眠と休息が十分とれるように援助する。
- ⑥患者の姿勢が安楽になるよう工夫，援助する。
- ⑦患者の身体が清潔に保てるように援助する。
- ⑧患者の衣類を適切に選び着脱への援助をする。
- ⑨患者の安全が守れる方法を知り援助する。
- ⑩患者の感情欲求が表現できるように，コミュニケーションを円滑に援助する。
- ⑪患者の信仰にしたがった生活ができるように援助する。
- ⑫患者の入院生活に充実感を持たせるように援助する。

基礎的看護技術は，医学書院出版の看護学総論に基づいて，学内で学んだ項目である。実践はチェックリストに基づいて行い，自己評価をするとともに，経験録に記入する。

6) 学内演習

基礎実習に出る前に，演習の中で基礎実習に対する不安について討議させ，問題点を抽出し演習の中で学習させる。44人の学生の問題点を整理すると，次のような問題が提起された。

- ①ヴァージニア・ヘンダーソンの基本的欲求がわからない。
- ②基礎的看護技術が未熟である。
- ③体力への不安がある。

基本的欲求については，各グループでテーマをもってグループ学習をする。方法は，ヴァージニア・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」を読んで欲求を満たす働きかけが看護であるとしている著者の看護観にふれ，患者の把握を系統的に行うのに役立てた。14項目をグループで分担し，文献検索によって，その項目の理解を深め，発表によって意見交換をした。

基礎的看護技術においては，基礎実習時の項目をグループ単位で分担し，資料を集めて討議，実践し，結果までをまとめて発表した。

Ⅲ 調査方法

1 対象

昭和55年度入学生第一看護科88人

2 期間

昭和56年5月18日～昭和56年5月30日

3 方法

アンケート内容は、実習前学内演習の効果と実習目的の認識度に関するものとした。アンケート用紙は、実習終了時に一斉に配布し回収した。

アンケート調査を基に、昭和54年から、昭和56年までの基礎実習計画および指導上の問題を明確にし、看護学総論担当者の立場から問題を検討した。

Ⅳ 調査結果

アンケートの回収率は100%（学生数88人中6人欠席であった）各項目にしたがって分析した結果は次の通りである（表4）。

1) 2つの実習目的について、別々に自己評価したものである。

①受持患者の基本的欲求の把握と援助については、45.2%が普通か普通以上できたと自己評価している。

②基礎的看護技術の体験については、56.2%が普通か普通以上できたと自己評価している。

表4 アンケート結果

解答者 82人



2つの目的についてその自己評価が、普通以下と答えたものをみると、10人が基本的欲求の把握の方が難しかったとっている。

2) 受持患者とのコミュニケーションが、とれたと感じたのは、1から2日目87.8%、3から4日目48.8%、4日目以後8.5%、実習期間内にとれなかった者4.9%である。したがって、基礎実習期間内に、95.1%の者がコミュニケーションがとれたといえる。

3から4日目にとれたとする40人の受持患者についてみると、付添のいる者21人、意識レベル低下患者はなしであった。4日目以後にとれたとする7人についてみると、付添のいる者6人、意識レベル低下患者2人、重症または末期患者1人である。実習期間内にとれなかったとする4人についてみると、付添のいる者3人、意識レベル低下患者2人となっている。

以上の事から、コミュニケーションが基礎実習期間中に取れなかったとする者の受持患者は、重症であるか意識レベル低下で付添がいる。4日目以後にとれたと回答した者は、基礎実習期間内に、コミュニケーションがとりにくかったといえる。これら11人については、患者の選定にも問題があったと考えられる。

3) 患者の基本的欲求を把握するために挙げている12項目について、難しかったものについてみると次のようである。

患者の状態を観察する12項目のうち、難しかったと答えた比率の多いものは、生活の充実感24.0%、コミュニケーション22.8%、信仰13.4%であった。生活の充実感、コミュニケーション、信仰は学内での体験学習が難しい項目である。

次に多いものは、排泄8.5%、呼吸7.3%、安全6.1%である。これらの項目は、患者1人1人により看護者の自己判断が要求される項目である。

比率の少ないものは、食生活4.9%、睡眠4.5%、清潔4.5%、姿勢1.6%、衣類1.6%、体温0.8%、これらについては経験項目との参照の必要があるが、日常生活の中で誰もが頻回に経験する項目である。

以上の点から基本的欲求12項目のうち、学生の自己の体験の中で経験しやすい項目や、学内演習で体験学習が可能な項目は、基本的欲求がとらえやすいといえる。

4) 実習目的の1つとしている基礎的看護技術の体験は、チェックリストによる自己評価と経験録に記入することになっているが、基礎学習だけに使うチェックリストの活用状況について、活用した者76.8%、活用しなかった者23.2%である。活用しなかったと答えた者について、その理由を見ると、忘れていた、見ていなかったが14人、活用する余裕がなかったが4人、病棟が忙しすぎたが1人である。各病棟による差はなかった。

5) 基礎実習開始前に実習に対する不安について討議し、その中では、

①ヴァージニア・ヘンダーソンの基本的欲求が分からない。

②基礎的看護技術が未熟である。

この2つのことを学内演習の課題として取り上げた。その効果についてみると、基礎実習前における看護技術の学内演習が役立った者72.0%、役立たなかった者28.0%である。役立たなか

ったと答えた者の理由を見ると、学校と病棟では物品と手順が違い、そして、患者によっても手順が違うと答えている者が16人であった。学生と教員のかかわりを見ると、看護総論担当教員が指導した病棟では3人、看護総論担当教員が指導しなかった病棟では18人の者が役立たなかったと答えている。役立ったと答えた72%の学生も病棟の状況は同じであるので、役立たなかったためではなく、学校と病棟では物品と手順が違い、学習した手順通りに実行することができなく、基本的看護技術を学内演習で行った通りに臨床場面で使えなかったために、学生は役立たなかったと受けとめている。

6) 患者の基本的欲求を把握するのに、ヘンダーソンの分析学習を十分活用した者3.7%、まあまあ活用した者74.3%、ほとんど活用しなかった者22.0%であった。活用しなかったとする18人についてみると、余裕がなかった者6人、観察ができなかった者3人、会話ができない受け持ち患者である者2人、学習内容が頭の中に入っていない、プリントができていなかった、なんとなく活用しなかった、といった者5人、呼吸、体温は活用したが、他は活用しなかった者1人、その他、役に立たなかった者1人であった。

以上の点から、78.0%の学生が活用したとしている。また、活用しなかったとする18人についても記録の形式が基本的欲求にそっているため、何らかの形で活用していることが考えられる。

7) 実習の目的達成、学内演習の効果を問うだけでなく、初めて病院の中で看護者として患者と対応した中から得た感動や学習面での気付きは、卒業までの学習姿勢にも大きな影響があると考えられる。それらの点について、基礎実習を終えて一番足りないと感じたのは5項目のうち、観察、コミュニケーションの技術51.1%、医学、看護学の知識36.3%、基礎的看護技術8.8%、記録、報告の技術2.5%、その他1.3%である。

V 考 察

実習目的である患者の基本的欲求の把握と、基礎的看護技術の体験をするのに必要な知識や技術、さらに、実習の不安を軽減させるため、学内で演習した事が実際場面でどれだけ活用できたかというアンケート結果から、基礎実習の今後の方向づけを明らかにする事を考えた。

2つの実習目的については、45%~56%の者が普通か普通以上できたとしている。これは、初めて患者と接したこと、5日間という限られた期間であったこと、そして、基本的欲求を把握し、援助の方法を学ぶという看護過程の基本段階までを求めていること等から考えると、当然の結果ともいえる。これは、基礎実習の目的が2つあることも原因と考えられる。患者の基本的欲求を理解し、それを満たすための援助の方法を学ぶことを主目的とした実習ができるよう看護技術の授業を工夫する必要がある。それは、看護概論で「看護の基本となるもの」にふれ、ヴァージニア・ヘンダーソンの看護観が理解できるようにしておく。看護技術の学内演習でチェックリストを活用した学習方法を取り入れる。そして、基礎実習の中で得た事例を基に、演習計画を立てることによって、成人実習への順調な導入をはかることができると思われる。

観察，コミュニケーションが，実習期間内にとれたかどうかについては96%の人がとれたとしている。しかし，これは1人の患者との関係を問うたものであり，看護が患者の欲求を把握し，その充足を援助する過程である以上，最も基本的な技術であり，自己を見つめるという訓練と，経験により体得していかなければならないと考える。

受け持ち患者の選定に当たっては，臨床指導者に実習の目的を理解し，軽症で身体的ケアを必要とし，心理面で問題が少ない患者を受け持たせてもらえるような働きかけをすることも，総論担当教員の役割であると考えられる。

実習計画，時期，指導上の問題に対する方向づけを考えてみると，

(1) 実習方法について

患者を1人受けもつのは，短期間でコミュニケーションをとり，欲求を把握する上にはよいが，その患者が軽症で，身体的ケアを必要とし，心理面で問題が少ないという条件を持っている人であることが望ましい。

(2) 時期について

看護概論，看護技術における基礎的看護技術項目が終わる1年次2学期または3学期の初めごろがよい。

看護学総論の一環であるなら，総論の授業期間中に実施するのが効果がある。

看護の場に出て体験したものを基に演習計画が立てられ，次の成人看護実習への順調な導入が可能となる。

指導教員の立場からも授業担当時期に病院実習指導にでることになるので，他の業務への支障が少ない。

(3) 期間について

病院実習期間が1人当たり5日間であるのは，実習目的からいっても短いといえるが，教員が病院実習指導に当たることができる時間数から考えて，現在の教育体制では無理である。しかし，実習目的が基礎実習だけのものでなく，臨床実習全体に共通したものであるから，総論の授業方法，実習時期，実習方法によって，基礎実習段階の目的達成は可能となる。

(4) 実習場所について

川崎医科大学附属病院の成人内科と外科病棟で基礎実習をしている。看護用具，指導者の点で考慮すべきことはあるが，教育の場としての大きな問題は考えられない。

(5) 基礎実習前の教育，指導について

看護学総論を担当する教員が，基礎実習の位置づけを十分に認識した授業をすること。

「看護の基本となるもの」，チェックリストの活用をさせること。

患者の欲求を把握するには，自分を見つめ，自己の体験を豊かにする訓練が必要であり，入学時からの生活指導が大事である。

臨床指導者への事前説明は，基礎実習の目的を十分理解し協力してもらうこと（受け持ち患者の選定など）。

総論担当教員が、どのグループの学生にも指導できるような学生数に応じた教員体制が望まれる。

総論担当教員が指導に当たったグループと臨床指導者のみのグループでは、学校で学んだ知識技術を実際場面で適用する場合の配慮、疑問に対する助言、不安の軽減といった点において差がでている。総論担当教員がいれば、学生が疑問を感じた時点での助言が可能であり、カンファレンス等の場で問題を解決していくこともできる。

基礎実習は基礎的看護技術をできる限り基本に添って実施することが、その目的の1つにもなっている。それが実施しやすい患者であり、そして、基礎的技術を使って看護する必要な物品が整備されていることが望ましい。

総論担当教員は、臨床指導者とともに、そうした教育的環境作りをするという役割があることを認識する必要がある。

Ⅶ おわりに

本学看護科は、3年制の第一看護科と2年制の第二看護科がある。学生数、教員組織の上からも、それぞれの科の特殊性を生かした教育目標を達成するための、教育計画を立てることは難しい状況にある。

こうした現状の中で、看護学の土台である看護学総論の一環としての基礎実習をより効果のあるものにするには、どこを改善したらよいかを検討してきた。そして、看護学総論の教育方法、実習時期、演習のもち方などについて、担当教員間の共通した認識の必要性を再確認することができた。

基礎実習は、短期間とはいえ、看護教育の基礎であり、臨床実習への導入という位置を持っている。今回は、看護学総論における基礎実習という立場から検討してみたが、臨床実習における基礎実習の位置づけという点から検討すべき問題が残されている。

文 献

- 1) Virginia Henderson 著・湯楨ます、小玉香津子訳；改訂版・看護の基本となるもの 日本看護協会出版会（1975）
- 2) 湯楨ます、薄井担子、波多野梗子、小玉香津子；看護学総論 医学書院
- 3) Virginia Henderson 他著・稲田八重子他訳；看護の本質 現代社（1974）
- 4) 床田弘子、藍原キミヨ、赤木知子他；実習指針と第1回基礎実習 看護展望3(4) 369-378（1978）
- 5) 看護学校カリキュラム 最新ガイダンス、メヂカルフレンド社
- 6) 新田麗子、八頭司佳世乃；看護学総論実習を振り返って 看護教育 20(2) 84-94（1979）

